

中海・宍道湖沿岸環境検討会 議事録

1. 日時 令和3年10月21日(木) 14:00~16:00

2. 場所 出雲河川事務所 大会議室

3. 出席者

(1) 委員

國井 秀伸(島根大学 名誉教授):WEB会議方式による参加

佐藤 仁志(島根大学 非常勤講師)

中村 幹雄(元 島根県内水面水産試験場長)

裕見 吉晴(鳥取大学 学長顧問):WEB会議方式による参加

淀江 賢一郎(元 宍道湖自然館館長)

(2) 鳥取県

和久田 倍作(生活環境部 暮らしの安心局 水環境保全課 課長補佐)

森 明寛(衛生環境研究所 水環境対策チーム サブチーム長)

(3) 島根県

原 颯太郎(農林水産部 水産課 漁場環境・内水面グループ 主任)

狩野 好宏(環境生活部 環境政策課 宍道湖・中海対策推進室 企画幹)

(4) 国土交通省 中国地方整備局 出雲河川国道事務所

武内 慶了、細田 佳男、若井 克文、藤井 泰宏、三原 康宏

北川 克治(中海出張所)、江島 悟(大橋川出張所)、中村 正三(平田出張所)

4. 議事録

【資料1】令和2年度 沿岸環境検討会での意見対応について

→質疑無し。

【資料2】整備箇所モニタリング計画について

→質疑無し。

【資料3】令和2年度 浅場・覆砂工事实施箇所について

→質疑無し。

【資料4】令和3年度 浅場・覆砂工事实施予定箇所について

○中村委員

(質問)

・林③地区の整備は令和3年度に実施予定か。

→事務局回答:林③地区については、現在整備内容について検討中。

・林③地区は良い整備箇所としたいため、整備内容について意見を聞いていただきたい。

→事務局回答:林③地区の整備について意見を伺わせていただく。

・中海では石炭灰造粒物を使用しているため、「覆砂」との表現を見直してはどうか。石炭灰造粒物の成分を調べることを検討いただきたい。

→事務局回答：資料の表現方法や石炭灰造立物の成分分析の実施について、今後検討する。

【資料5】令和2年度 モニタリング調査およびその結果について

○中村委員

(意見)

- ・現地調査では、全ての自然現象を調査結果から説明することは難しいため、必ずしも要因分析を行う必要はないと思う。

○裕見委員

(意見)

- ・中村委員の意見に賛成である。

→事務局回答：ご助言について了解した。

○中村委員

(意見)

- ・資料の5-9で林②地区で「漂砂している状況が確認された」という表現にしているが、林②の場合は、「漂砂した」という表現のほうが適切である。

→事務局回答：資料を「漂砂している」から「漂砂していた」に修正。

- ・林②地区は出水がなくとも徐々に整備区からの砂が流出すると考えている。

→事務局回答：漂砂状況調査については、今後も継続する予定。

- ・漂砂状況調査の継続について了解した。

- ・空撮画像は天候の具合や水位の高さの影響を受けるため比較は難しいが、できるだけ条件を揃えるほうが望ましい

→事務局回答：漂砂状況調査については撮影条件を揃えるよう検討する。

○裕見委員

(意見)

- ・林②地区の空撮では、整備区西側の突堤の先端が水面上に見えている時に撮影するとよい。

→事務局回答：撮影時期については所内で検討する。

○裕見委員

(意見)

- ・令和3年3月の施工直後から4月にかけて整備区西側突堤の西側に砂が溜まっているが、この砂がどこから漂砂してきたのかを調査してほしい。西から東に向けての漂砂があるのであれば、整備区東側に砂が溜まったことの原因としても考えられる。

○中村委員

(意見)

- ・施工中に東風が強い日があって、入れた砂が突堤を超えて堆積したのだと考えている。

○裕見委員

(意見)

- ・整備区西側の突堤は東側にL字型に曲げているので、水中の砂が西側に回り込む影響は少ないはずである。そのため、中村委員の意見のいう風で突堤の上を超えたという可能性はあると思う。

○國井委員

(意見)

- ・東風の状況については、当時の気象データを参照するとよい。
- 事務局回答：整備区、整備区西側、東側で粒度組成を調査し、土質が同様のものかを確認する。

○事務局報告

- ・新生堆積物調査は令和3年度調査で終了とする。
- 検討会委員：米子湾内の新生堆積物調査は、令和3年度調査で終了することで問題ない。

○國井委員

(意見)

- ・資料5-14で測点8のアサリの個体数が夏季から秋季にかけて減少していることについて、原因の考察があれば記載した方がよいのではないか。
- 事務局回答：測点8でアサリの生息数が夏季から秋季にかけて減少した理由は、夏場の貧酸素水塊によるものと考えている。

(質問)

- ・資料5-15で事前に比べて事後のD0が減っているが原因について説明をお願いしたい。
- 資料5-15のD0の違いについては、令和2年度の調査時に貧酸素水塊が米子湾の底層に存在していたためと推察している。
- ・了解した。

○中村委員

(意見)

- ・本結果を資料に整理する際は、委員に個別に意見を聞いてから整理した方がよい。
- 事務局回答：了解した。

○佐藤委員

(意見)

- ・鹿園寺地区及び秋鹿地区の鳥類調査を実施していただき感謝する。予想通りの結果がでており、鳥類の休息場としての浅場造成の効果が発揮されていると思う。効果が現れた理由としては、休息場となる消波工の存在が直接的に影響していると考えられるため、資料内に追記したほうがよい。
- 事務局回答：承知した。資料5-7にその旨を記載する。

○淀江委員

(意見)

- ・宍道湖ではナゴヤサナエが減少している。以前、秋鹿地区はナゴヤサナエが多数生息していたことから、今後も秋鹿地区でモニタリングが続くのであれば、ナゴヤサナエも一度調査していただければと思う。
- 事務局回答：調査実施については今後検討する。

○佐藤委員

(意見)

- ・ナゴヤサナエは護岸等に登って羽化するため、浅場による砂浜の増加は逆効果である。その代

わり、浅場整備で設置した構造物を利用する可能性もあり、蛇籠に杭を挿すだけでもナゴヤサ
ナエの羽化場として利用されると思う。
→事務局回答：今後の設計時に検討する。

【資料6】令和3年度 モニタリング調査予定について（案）

○國井委員

（意見）

・基盤材の厚さは、基盤調査と底質調査で確認するという事でよいか。

→事務局回答：ご指摘のとおり。

○佐藤委員

（意見）

・基盤調査という名称が調査の内容と合わないと思うが名称を変えてみてはどうか。

○裕見委員

（意見）

・海岸工学では、海底勾配等を整理する調査を深浅測量と表現する。

→事務局回答：基盤調査の記載については、深浅測量（基盤調査）に記載を修正する。

○中村委員

（意見）

・整備箇所に薄く残った砂を深浅測量で計測できるか不安がある。深浅測量と同時に潜水して水中の砂厚を測ると良いと思う。

○裕見委員

（意見）

・事前と事後の深浅測量をして、その差が堆積厚になるので、深浅測量だけでも良いと思うが、海岸工学での理解で、汽水や湖水はわからない。一般的には深浅測量という言葉の方が通じると思う。

→事務局回答：意見について了解した。潜水調査の実施について検討する。

【その他】

→質疑無し。